

ひかりのキミ・・・  
(番外)

月雲 花風

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

東雲秀司（しののめしゅうじ）と北山達也（きたやまたつや）のSEXがらみの話です。ただ、書き手の私でさえも思いもよらぬ言葉を東雲が、北山に言ったのでびっくりです。

第1話

# 目次

1



## 第1話

朝、いきなり東雲・・・シノは、不機嫌だった。不機嫌とは違うな、何がどう違うか俺にはわからないが、でも普通じゃないことは確かだった。キスを拒んだのだ。

「わるい・・・気分じゃないんだ。ごめん。」

の一言で事態の收拾を図った。その場を離れて俺の視線を誤魔化していた。大学にはシノが先に向かった。釈然としないまま、俺は午後一の講義までの時間、本屋と図書室にいた。バイトでシノは週四日夜が遅い。もつともこのアパートでシノを抱くのはきついけど、マメだと思っていた。釈然としないものが残ったので、ホモバーにむかった。久しぶりだ。

「こんばんは〜。」

「おつやあ〜〜〜いらつしやい。」

ホント久しぶりねえ。どうしたの？彼ができてから来なかったのに・・・喧嘩でもしたの？」

「ちよつと相談が・・・ママいるかな？」

「めずらしい。そこ掛けてて・・・時間空いたら、くると思うから。」

釈然としないものが何か・・・俺がはつきりわかってないと、これからがやばい気がする。

シノはのんびりした育ちだが、自分に納得がいかないのを嫌う。俺は性格だろうな、納得できないとことん追及してしまう。俺たちは、俺がしっかりしないと絶対別れることになる、と思っている。俺が中途半端に誤魔化しても、シノは絶対納得しないだろう。それはやばすぎる。

ドリンクのカップを持ってため息をつく。何度目だろうか・・・

「あんた本当に困ってるみたいねえ。ちよつと話して見なさいよ・・・。」  
「あのさ・・・ネコって、何か変わるのか・・・な?」

驚いた顔で見つめられた。

「あんた、本当に困ってたのねえ。びっくりしたワ!」

「でなきや、金も無いのにこねえよ!!」

マジ金はない。なじみでなきやこんな店来れるはずもなかった。だが、用は相談だ。将来のためだし・・・今解決できるのだったらしなきやいけない。

いらつしやいませ〜!と、聞いた声がある。ママが来たのだった。

「いらつしや。聞いたわよ・・・それ飲んだら帰りなさい。終業時間にいらつしやいな。金の無い」

奴が無駄金使ってるんじゃないの。」

「あ……ごめん。解った……。じゃ、一時頃に、表からでいいのかな？」

ママが、俺の顔見て大きく息をついた。

「本当に困ってるのね。それでいいわ。まってるからね……。」

アパートに戻る。シノはバイトで居なかった。だが店に行くには、シノとすれ違う。メモを残して出かけた。

同姓の生活がホモだからってわけでもないけど、それでも、俺より生きてる時間が長い分わかっていることは多いだろうと、相談には乗ってもらっていた。ネコに関してまったく解らず、もっぱらホモバーのママにするしかなく、他の奴は……。たまに浅葱さんに声掛けさせてもらっていた。

シノに何かあったなんて学校でも聞いてないし……。シノ自体がそんな風ではなかった。だったら生活のことしかない。

人も最終電車が近い分、まばらになってきていた。すれ違う人も少なく……。急ぎ店に向かった。

「くんばんは。」

「まってるわよ。」

店は客が居なかった。ママ一人だけで、ホストも見えない。俺はなんとなくよく

息がつける気がした。

「さつきはごめん。」

「はい。お酒はだめよ。」

ソフトドリンクでのどを潤す。

「ちよつと聞いたのだけど・・・ネコの相談って、東雲君のことなの？」

カウンターを挟んでタバコを吸いながら、ママが立っていた。

「東雲君はバイト？」

頷く。ママが息ついて言葉にした。

「何なのか解らないけど、彼も来た方がよかつたんじゃない？結構かれも頑固そうだし・・・」

「いや・・・なにから相談していいのかわからなくて・・・こんなことママ・・・ってか瀬尾さんしか  
できないから。」

「なんなのよ？相談って・・・」

「・・・キスができなくて・・・」

瀬尾さんの顔が思いつきりあきれ返つたようになった。気がついた発端はそこだし、とりあえず話を続ける。現状の生活を話すしかなかった。



「達也．．．あんたは、どのくらい東雲君を抱いてるの？」

え・え!!!いきなりそこかあ!!

「決めは無いけど．．．週に2，3回ぐらいかな。夏以降は．．．そういやあここ二月はないかな

．．．」

大きくため息を瀬尾さんはついた。

「それね．．．でも、あんた自覚が無さ過ぎるわ。わかっているの？東雲君の体のこと．．．」  
「え？．．．病気とか？．．．体って、あいつ何かあるのか？」

瀬尾さんは頭を抱えた。カウンターから席に場所を移して向かい合って座った。グラスも改めてもらった。

「東雲君。ずいぶん苦勞してるわねえ．．．」

確かに時々、なんか熱っぽそうにしたりすること有るけど、聞いても返事はないし．．．。たぶん、シノも解ってないんだろうな、もしかすると．．．。

「今までにも話、聞いてきたけど．．．東雲君が完全にネコなのよねえ？．．．彼、気がついてないの

かしら．．．」

タバコを噴出してから話を続ける。

「体って変化するのよ……ネコの場合。ちんちんが取れるとか胸がでかくなるとじゃ無くてね」

周期見たいに、抱かれることを体が望むの。」

え……？それって……考え及ばない俺はほうけた顔してただろう。あきれて瀬尾さん話を続けた。

「東雲君がそれに気づいてないんじゃないじゃ、今すごく大変だわね。……かわいいそうね。東雲君」

「じゃ……キスができないって……」

「キスだけで変化してしまう体が怖かったんでしようね、彼は。」

瀬尾さんにならまれてしまった。タバコをもみ消して、新しい奴をだす。

「あんた、本当にわかっているの？あの子、ノーマルだったのよね？」

「お・俺。シノが何もいわないし……俺が……」

「あんたがどれだけあの子、かわいがってるか話を聞けばわかるわ。寝始めて、1年経ってないの」

に体が変わってくるって、よっぼど愛があるのよね、相手に。」

俺の狼狽に言葉なく瀬尾さんが話を続ける。

「達也。」

あなたはここで相談も出来るからいいけど、あのこは一人で抱え込んでるのよ。あのね・・・自

慰も変わるのよ。私が知ってるわけじゃないけど、暮らしたことある子がねそう言うってわわ。」

シノ、それもできなかったのか？解らずにいて、もしかして、病気だと思い始めてるとか・・・。急に寒気が走った。俺は、自分が好きな奴を変化させてしまった？元に戻れない？・・・それって・・・

「前だけじゃ、だめなんだって。後ろにも指、使わないと・・・東雲君、自分の体の変化、どう受

け止めてるのかしらね。変化だって気がつけばいいけど・・・気がついててもねえ。」

たぶん血の気が引いて青かったのかも。俺の変化見ていた瀬尾さんは、慌てて続けた。

「それだって、別な生活が続けば変わるでしょうから・・・よく知らないけど。あんただけのせい

じゃないのよ！解ってる？」

煙を噴出して、瀬尾さんが言った。

「いいから帰りな。東雲君、待ってると思うから・・・ちゃんと話してね。彼に・・・」

「ありがとう。今度シノも連れてくるから・・・」

慌ててがたがたと店を飛び出した。終電に間に合ってよかった。座ることもせず、東雲のことだけを考えて入り口に立ち尽くしていた。

アパートは真つ暗だった。東雲はもう寝たのかもしれない。だが話をしなければ・・・

「シノ・・・寝た？入るぞ・・・」

「シノ・・・いけたのか？」

ベッドに近づく。畳に上着を置いてるときシノの気配がした。

「おかえり・・・俺、いけない・・・病気なのかも、どうしよう・・・」

不安でいっぱいの声。もしかして・・・泣いてたのかも・・・

「う・・・しろ、使わないと・・・いけない。こんなこと無かったのに・・・」

明かりのスイッチを入れる。薄明るくなった。シノは掛け布団で下半身を隠したまま起き上がっていた。顔色は恥ずかしきで赤っぽくも見えるが・・・体も震えてるように見える。

「俺の体・・・変だ・・・昨日の晩、キスしたときからおかしくて・・・ごめん。今朝もまだ残ってて

キスできなかった。俺・・・病気かも・・・やばいのかな、でも・・・洗濯物は別にしてあ

るから気

にしなくていいと思う。一緒に洗ってないし。」

「洗濯物って……いつから?」

「一緒に洗わなくなったのは2週間前ぐらい。……体がおかしく感じ始めて、二週間も黙ってて、

ごめんよ。」

ベッドに腰掛けるとシノを抱きしめた。

「わるい。ごめんよシノ。一人で不安抱えてたんだね。ほんとにごめんよ。」

「達也?」

秀司にキスすると、立ち上がってる秀司のものに口付け含んで愛撫する。

「だ・だめだ。やめろ……。やばいか・ら……。う・あう……」

時間かけずに秀司は俺の口の中に放った。

「はっ……。どうしよう。達也……。吐いたほうがいい……。お・俺……」

俺は服を脱ぎはなつ。

「た……。達也?だ……。だ・めだ……。って……。ああ・うん……。ひああ……」

シノは拒もうと、腕をつつたてるが、体は俺を受け入れてるのだから……。役立ちはない。すんなりシノの中におれ自身が納まってしまった。入れたまま、口付け首脇に舌

を這わせ、鎖骨をなめて乳首に達する。乳首を吸い上げ噛み付き舐める。それで、シノの声は変わる。

「うん・あふ……ひあ……ああ・ん……」

「秀司……」

俺の声に秀司が腕を背に回し、抱きしめる。

「き・気持ちいい……達……也……うれしい……」

「動くよ」

秀司の腕に力がこもる。了解ということだ。一度……グンと入れただけで秀司が声を上げた。

「あ……あああ……」

2度目の到達？腕がずりおちて、俺が腰を使う。口づけ愛撫し……腰を使えば、秀司はさすがにつき、腰を動かす。これは体の要求？自然の成り立ち……。でも秀司は気がついてない。体が俺を求めることに……。改めて自分の選んだパートナーを眺めてしまふ。

体格はスマートなほう……かな。いらぬ肉が無い体系？って、感じか……。黒髪しつかりしてるが細め。十人並みの顔だと思う。でも、ノーマルも夜は娼婦って感じか。

我慢も聴かなくなつて、上り詰める。

「あ……あ……うん……ああ……ああ……ああん……」

秀司の声がきわまって、俺も達する。秀司の上に体を重ねる。抜かぬままだった。

「秀司、……体の変化は気がついてなかった?。」

「達也……抜いて。このままじゃやだ。」

「俺もやだ。秀司の中に居たい。」

「……この格好嫌いなもの知ってるじゃないか。いじわるだな……。」

キスをする。

「体……気がついてた?。」

視線を外せず、目を伏せる秀司。

「はつきり……ちがってるって、そう、思ったのは……二週間前だ。オナニーして……」

後ろ

使わないといけなかった。その時、おれ……変って?。」

意を決したような視線で俺を見つめてる。

「なあ、俺どうなってるんだと思う?……もしかして、達也に抱かれないってなつて

きてる?。」

「そういうことかな……?。」

「もし……そういう風になってたら……そうだったら、どうする?。」

秀司の目に、見る間に涙がたまり始めた。

「俺、男だし……」

なあ、達也は一生を俺と歩くつもりなのか？もしそうなら、俺、体が変わっていくのは拒否し

ない。いろいろ変わるかもだけど……二人だったら行けるさ」

思いつきり抱きしめる。長い……長い口付けをする。

「……た・達也、どうした？……す・け・べ……ああ」

「もう一度……秀司、愛してる。……動いていい？」

秀司の腕が、俺の背を抱く。キスに始まって、目立たぬ所にキスマークを、俺の印。首筋を舐めて、鎖骨にマークを……。わき腹にマークをつけまくって内腿に……。俺の秀司。俺の最高のパートナーをみつけた。大事な相手……大切な相手を。

「ああ……ああああ……あん……ああああ」

二人で一緒に達する。秀司を放して隣に横になる。掛け布団を秀司が掛ける。

「達也……？」

「俺……秀司にはかなわないのな。なんでお前そんなにいい奴なんだよ!!」

秀司が頭を殴る。

「いい奴は、お前だって同じだろう。達也。」



秀司が見つめる中、達也は涙を零し始めた。秀司があわてる。

「え？ええ?!ごめん。いたかった？どうしたんだ・・・ごめんよ?」

「俺・・・俺。死ぬまでお前と歩く。どんなになってもお前と一緒にだ。絶対離さない。秀司、愛してる。」

「てる。」

達也に腕を回して抱きしめた秀司。そしてキス。

「二人でがんばっていこうな。」

秀司の匂いの中で、声を上げて泣いてしまった。

俺はどんなことがあっても後悔しない。秀司がいるのだから・・・しっかりと歩いていこう。

大学を卒業した年、秀司は家族に告白して、勘当をくらった。

\*\*\*おわり\*\*\*